

## RESAS を活用した政策立案ワークショップ(岐阜県瑞浪市)

### 第1回概要

令和4年6月  
内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局  
内閣府地方創生推進室  
経済産業省中部経済産業局

岐阜県瑞浪市にて、若手職員等を中心に、「地域経済分析システム (RESAS)」を活用した政策立案ワークショップを下記のとおり開催しました。

瑞浪市は、今年度、中部経済産業局の支援を受けて RESAS 研修を 2 回実施したうえで、この度、まちづくりの専門家である森ビル株式会社都市開発本部計画企画部メディア企画部 参与 矢部俊男氏の協力を得て、瑞浪駅周辺再開発を題材にしたワークショップを開催しました。

瑞浪市職員による分析発表や有識者との意見交換を通じて、これまで瑞浪市で検討してきた瑞浪駅周辺再開発事業について、有効性をさらに高める施策を考える機会となりました。

#### 1. 第1回ワークショップの概要

- テーマ：瑞浪駅周辺再開発事業
- 日時：令和4年6月28日(火) 13時00分～15時00分
- 会場：瑞浪市役所4階全員協議会室
- 議題：(1) 瑞浪市の現状について(人口、駅前の状況など、現状をデータで分析した結果の報告)  
(2) まちづくりの事例紹介、今後の方向性について  
(3) 瑞浪駅周辺再開発に係る意見交換
- 共催：内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局  
内閣府地方創生推進室  
経済産業省中部経済産業局  
瑞浪市
- 参加者：瑞浪市  
森ビル株式会社 都市開発本部計画企画部  
メディア企画部 参与 矢部 俊男氏  
内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局  
内閣府地方創生推進室  
経済産業省中部経済産業局(総務企画部企画調査課)

## 2. 当日の発表及び意見交換等の概要

### ①瑞浪市の現状について（人口、駅前の状況など、現状をデータで分析した結果の報告）【瑞浪市よりプレゼン】

- 瑞浪市では現在、「未来の子どもたちに渡せるまち」のコンセプトのもと、瑞浪駅周辺の再開発計画を始動している。本ワークショップの目的は、RESAS等のデータを活用した分析を行いながら、本計画の有効性を高める施策を立案することにある。全3回のワークショップを通じて、データに基づき再開発計画をさらに有効なものとする施策を具体化し、今後の駅前再開発事業の関係者への根拠ある提案の一助とする。
- 岐阜県の東濃に位置する瑞浪市は、市域の70%が山林の自然豊かな街である一方、名古屋までJR中央本線で48分とアクセスも良好な街である。また、市内には高校3校、大学が1校あり、周辺地域と比較しても学生が多く訪れているという特徴がある。
- 瑞浪市の人口は、令和4年6月1日時点で36,354人。平成7年から令和2年にかけて人口が4,853人減少。2045年の総人口の推計値は26,692人と予測されている。また、少子高齢化も進行しており、2020年の老年人口割合は31.33%である。
- RESASの昼間人口・夜間人口データによれば、日中瑞浪市に滞在する人の居住地は、東濃5市(多治見市・土岐市・瑞浪市・恵那市・中津川市)が大半を占める。また、瑞浪市の夜間人口のうち、1,464人が日中時間帯に名古屋に滞在している。このことから瑞浪駅の利用には一定の需要があると考えられる。
- 瑞浪市民1,000人を対象とした市民アンケートでは、公共交通が整っていないと感じる割合が65.6%、観光資源の魅力が高まっていないと感じる割合は72.3%という結果が出ている。このことから公共交通と観光資源はどちらも充実度を高める必要がある。
- 瑞浪市では瑞浪市子ども・子育て支援事業計画を策定して子育て世代の女性へのサポートに注力しており、瑞浪市の女性の労働力率は全国平均の48.1%を上回る50.6%となっている。
- 瑞浪駅周辺の再開発事業では、「未来の子どもたちに渡せるまち」のコンセプトのもと、働く女性や子育て世代に優しい空間作りを提案することを目指す。

### ②まちづくりの事例紹介、今後の方向性について説明(詳細は発表資料参照)

#### 【有識者よりプレゼン】

- 長野県茅野市に二拠点住居の拠点を作ったことをきっかけに、茅野市の

地方創生に携わることとなった。当時茅野市の駅前の商業施設が衰退してきており、市長から「若者の流出を食い止めるため、茅野市に都会を持ってきてほしい。駅前に何か作って欲しい」というリクエストを受け、調査を始めた。

- 「機能の複合化・駅前整備」をテーマに、まずは駅前にハード・ソフト両面からどのようなニーズがあるのかを1年ほどかけて調査した。茅野市における産業の活性化や魅力あるまちづくりを実現するためには、市内外の様々な場所から「人、モノ、情報」が集まり、それらが相互に繋がるような拠点(コワーキングスペース等)が必要だと考え、「ワークラボ八ヶ岳」を作った。
- 「ワークラボ八ヶ岳」は以下の機能を有している。
  - コワーキング機能
    - 全体 200 坪で、個室が 10 室、会議室が 4 室。マーケット調査結果から規模等の仕様を決めた。コワーキングスペースの稼働率は 2018 年 3 月から現在まで 100%。
  - 産学・地域連携機能
    - 茅野市は公立諏訪東京理科大学と包括契約を締結しており、同大学の学生は、学生証を提示すれば無料でコワーキングスペースを利用可能(利用料金は大学が負担)。学生との交流会等も開催している。
  - 企業業務支援機能
    - スワリカブランド事業の一環として、地方創生交付金を活用しながら、土石流や水害を探知するための水位計測センサーの開発プロジェクトを誘致。市内の河川約 50 か所にセンサーを設置している。
  - ものづくり機能
    - 3D プリンタをコワーキングスペース内に設置し、ものづくり企業を誘致することで、テナントを確保している。なお、3D プリンタを設置するだけでは誘致に繋がらないケースもあることに留意が必要。
- 「ワークラボ八ヶ岳」は、現在第 2 段階。「市民広場」となるまちライブラリーエリアを 2022 年 6 月 25 日にオープン。
- 茅野市版 MaaS「のらざあ」について。茅野市では地域公共交通に関する課題を解決するため、AI 乗合オンデマンドバスの実証実験を開始。実証の結果、評判が良かったため、今年の 8 月 22 日から運行を開始することとなった。
- AI 乗り合いオンデマンドバスについては、高校生と高齢者の利用が多いことは想定されていたが、本実証実験を通じて地域公共交通の在り方が、女性の働き方にも大きく影響することが分かった。地方では女性が

子ども等の送迎に費やす時間が多い。そのため女性は、フルタイムの仕事よりもパートタイムの仕事の方を希望することが多くなってしまい、キャリアが積めない、収入も上がらないといったことに繋がっていると考えられる。

- モータリゼーションにより一時的に駅の需要は低下したが、Society5.0の時代では駅の需要が復活すると考えられる。地方の駅前再開発では、成功事例含め色々な事例を見ながら検討をすると良い。

### ③意見交換

i. データから読み取れる瑞浪市の特徴・課題は何か。

<駅の機能について>

- 市内に高校や大学があり人口の割に駅利用者は多いが、滞在するという感じではないため、滞在させるにはどうすれば良いかが課題。また、近隣の土岐市では最近新しいモールができ、このままでは瑞浪市は素通りされることが多くなるかもしれない。駅周辺に新しい施設も必要となるのかもしれない。
- 近隣の市の駅周辺にはマンション等が多いが、瑞浪市にはそれがない。駅周辺に居住できるという事が一つのポイントになるのではないか。駅周辺に住んで都市圏に通勤する人や、駅周辺に滞在する人など様々であるが、流出人口は抑えられるのではないか。
- 働く女性の環境を整えることが重要。図書館の在り方についても、仕事を生む場ではないため、働く施設を併設することを検討する必要がある。テレワークの需要は、下がることはなく、間違いなく上がっていく。こうしたスペースのPR戦略を練っていくことは重要。瑞浪市は地盤がしっかりしているイメージがあるので、こうした部分もPRになる。
- 何をしたいかを明確にすることが必須。例えば、総菜屋、クリーニング屋など、特に働く女性が生活する上で必要なありとあらゆる店を駅周辺に揃えて、徹底的にそれを売りにすれば、近隣市にも負けない再開発が実現できるのではないか。

<観光・PRについて>

- 瑞浪市の観光資源をPRするため、公式のSNSを運用しているが、興味を持っている人、アンテナを高くしている人しか気づかない。PR力の低さが課題ではないか。
- 化石等の観光資源にエンタメ志向を取り入れることにより、ロコミ等で費用をかけずにPRすることができるのではないか。

- 観光資源は、市民から見れば当たり前にあるものばかり。PR を積極的に行わなければならない。
- 観光分野にどのくらい重点を置くかは、全産業のうち観光の比率はどのくらいか、という事を踏まえた議論が必要ではないか。仕事がないと、若い人が出ていくというのは間違いない。また、高校生が駅を多く利用するとの事だが、それにはあまりとらわれない方がいい。あまりお金の動きがなく、それにより当然仕事としても成り立たない。

#### <交通について>

- 交通の面では、そもそも駅へ行くまでの移動手段が課題となっている。
- 市民アンケートでは、「これからも瑞浪市に住み続けたい」と答えた人の割合が大きかった。それにもかかわらず転出は多いため、転出せざるを得ない人が多いのではないか。公共交通が充実していないことが、瑞浪市にとどまることができない原因になっているのではないか。

#### ii. 他地域の事例で瑞浪市に応用可能なケースがあるか。

##### <コワーキングスペースについて>

- 矢部氏にご紹介いただいた茅野市の事例の中で、コワーキングスペースを作る点が瑞浪市でも参考になるのではないか。働く人の環境を整えることが必要。
- 茅野市の事例では、コワーキングスペースを設けたことで、他市から移住する人もいた。元来オフィスを設けて仕事をするのが一般的だったが、コロナ禍の需要変化により決まった場所でなくても仕事ができるようになったのが一因。ニーズに合うものを作るべき。
- 働く場所、生活できる場所を一体的に整備することで、例えば働く女性は子どもを預けることができ、かつ昼食は子どもと一緒に食べることができるようになるなど、マーケットのニーズに応えることができるのではないか。

#### iii. 再開発のターゲット層をどこにすべきか。

- 母親が送迎のため満足に働くことができないという問題も考えると、子育て世代がターゲットとなるのではないか。
- 子育て世代、働いている女性をターゲットにした方がいいのではないか。駅周辺の再開発については、駅だけではなく市全体を視野に入れ、暮らしやすい、働きやすい環境を作る必要がある。
- 名古屋に働く人が、瑞浪市に住みたいというニーズを徹底的に実現してい

くことが必要。中津川は妻籠・馬籠で観光は充実。瑞浪市はハーフ&ハーフ（観光&子育て）というコンセプトも面白い。宿場町の街道に魅力を感じる観光客は多い。都市圏から日帰りで行けるちょうどいい距離の観光を目指してはどうか。それでいて、女性にとって住みやすい地方都市というのは他に例がないのではないか。

- 瑞浪市では第7次総合計画の策定に向けて市民の皆様方の意見集約をしている。例えば駅前の「Mビル」を使って、学生と将来の瑞浪市について語り合う座談会等を実施している。その中で、瑞浪市の駅周辺の再開発事業も必要だが、学生から「子育て、女性に優しいまち」が必要だという意見があった。市役所に置いているボードにも同様のご意見をいただいている。
- 瑞浪市のシティプロモーションについても、子育て世代をターゲットとした方針を掲げている。情報発信は苦慮する部分ではあるが、積極的に行っていきたい。

### 3. 今後の方向性・次回に向けてのまとめ

第1回ワークショップでは、瑞浪市の現状や茅野市の事例を踏まえて、瑞浪駅周辺再開発におけるニーズを検討し、「未来の子どもたちに渡せるまち」というコンセプトの細分化を行い、子育て世代、働いている女性をターゲットにすること等が議論された。また、他市の再開発事例を参考に検討を進めることの重要性を認識した。

今後のワークショップでは、現地視察を通じて茅野市の事例分析を行うとともに、瑞浪駅周辺再開発におけるニーズやコンセプトの具体化を進め、当該再開発の有効性を高める施策の検討を行う。

以上